

エンゲルス『空想から科学へ』

——マルクスの「変革の精神」と「科学の目」を学ぶ

(初出『月刊学習』二〇〇三年四月)

はじめに——『空想から科学へ』を学ぶ意義

『空想から科学へ』は、一八八〇年、フランスの社会主義者ポール・ラファルグ（一八四二～一九一一、マルクスの次女ラウラの夫）の求めに応じて、エンゲルスが自著『反デューリング論』（正式には『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』一八七八年刊）から三つの章をえらんで再構成し、若干の説明をつけくわえてまとめ、フランス語に翻訳されて出版されたものです。そのときの表題は『空想的社会主義と科学的社会主義』で、マルクスが序文（発表時はラファルグの署名）を書いて、「科学的社会主義の入門書となるであろう」と紹介しました（古典選書シリーズ『空想から科学へ』新日本出版社、9ページ）。以下、『空想から科学へ』の引用は同書のページ数のみ記します。

そしてマルクスの予想のとおり本書は好評を博し、一八八三年には、あらためてドイツ語で出版されました。このとき、『空想から科学への社会主義の発展』という表題がつけられ、そこから『空想から科学へ』の名前で広く親しまれるようになります。日本でも、一九〇六（明治三九）年に、堺利彦による最初の翻訳が、彼の編集発行していた雑誌『社会主義研究』第4号に「科学的社会主義」の表題で掲載（このときは英語版からの重訳）され、いらいたくさんの翻訳が出版されています。

科学的社会主義の入門書

『空想から科学へ』の魅力は、なによりもマルクスが「科学的社会主義の入門書」と書いたように、科学的社会主義の理論の全体像が分かりやすく説明されていることです。

そもそも「科学的社会主義」ということばは、マルクス、エンゲルスに先立つ社会主義思想である「空想的社会主義」にたいすることばです。科学的社会主義の学説は、ある日、マルクスとエンゲルスが天才的に思いついたというようなものではなく、人類がそれまでの歴史のなかでつくりあげていた哲学や経済学、あるいは社会主義思想などの成果を徹底的に研究して、そのなかからマルクスたちがつくりあげたものです。その一つが、フランスのサン・シモンとフーリエ、イギリスのオーエンに代表される「空想的社会主義」の流れです。

彼らは、一九世紀はじめに、資本主義の矛盾や階級対立が明らかになりはじめたばかり

のときに、資本主義の害悪、不合理を批判し、資本主義に代わる合理的で理想的な未来社会はどんな社会でなければならぬかを考えました。そうすることによって、彼らは、社会主義思想の最初のあらわれとなりました。しかし、彼らに共通していたのは、その未来社会論を、それぞれの頭のなかで考え出した理想社会の青写真、見取り図としてしか示せなかったことです。そのために、理想社会を生み出す条件はどこにあるのか、誰がそれをつくるのか、それを明らかにすることができませんでした。

そこを、「科学の目」で明らかにしたところに、マルクス、エンゲルスの画期的な意義がありました。『空想から科学へ』は、そのことを分かりやすく明らかにしています。

第一章では、その空想的社会主義とは何であったのか、その歴史的な意義とのりこえられなければならなかった問題点とは何だったのかが解明されます。

第二章では、社会主義を空想から科学へ発展させたものは何であったのかが論じられ、弁証法とともに、マルクスの「二大発見」——史的唯物論と剰余価値の理論が紹介されています。

第三章では、科学的社会主義の立場から資本主義のもとでどのような矛盾がすすんでいるか、その矛盾を解決し、資本主義をのりこえた新しい社会を実現する条件がどのようにつくられているか、そしてその未来社会はどんな社会になるのかなどを明らかにしています。

ですから、『空想から科学へ』を学ぶことによって、私たちは、科学的社会主義の学説の全体像をつかむとともに、社会主義を空想から科学へと発展させたマルクスたちの「科学の目」を生きいきとつかむことができます。

科学的社会主義の普及に大きな役割

もちろん、マルクスの「科学の目」といったとき、いちばんの著作は『資本論』です。『資本論』は、マルクスの生涯をかけた著作で、第一部は一八六七年に初版が出版されていました。第二部、第三部はマルクスの生前には完成せず、エンゲルスがマルクスの死後、残された原稿をもとに編集し刊行しました。

マルクスは、『資本論』の執筆とともに、一八六四年につくられた国際労働者協会（インタナショナル）の活動にも力を注ぎました。そして、一八六九年のドイツ社会民主労働者党（創立大会のひらかれた都市の名前から「アイゼナッハ派」と呼ばれました）の結成をはじめとして、一八七〇年代からヨーロッパ各国に労働者の立場にたつ社会主義政党が結成されるようになりました。フランスでも、一八七九年に労働党が結成され、翌年の全国大会では、マルクスも協力し、みずから前文を書いた綱領が確認されています。これらの政党は、それぞれ程度の違いはありますが、科学的社会主義の立場に立とうとするものでした。

しかし、科学的社会主義への理解という点では、すでに『資本論』第一部が出版されて

いたとはいえ、非常な大部で、しかも発行部数もかぎられ（初版一〇〇〇部、一八七三年の第二版三〇〇〇部）、だれもが接するというわけにはいきませんでした。そんな状況のもとで、一八七〇年代にはマルクスと『資本論』を攻撃したデューリングの理論がドイツの党内でもはやされるといった事態も起こりました。それにたいして、エンゲルスがマルクスに代わって反論したのが、『空想から科学へ』のもとになった『反デューリング論』です。多くの人びとは、これらの著作を通じて、はじめて本格的に科学的社会主義の学説に接することができるようになりました。

『空想から科学へ』は、英語版が出た一八九二年までの一二年間に、一〇カ国語に翻訳され普及しました。その背景には、こうした事情もありました。

科学的社会主義の学説の普及という点では、『空想から科学へ』でのエンゲルスの独自の貢献もみておかなければなりません。資本主義のかかえる体制的な矛盾を、エンゲルスは「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」と定式化しました。また、その矛盾の深まりとともに資本主義の枠のなかで「生産の社会化」がすすむとして、株式会社、国有化とともに、一八七〇年代になって広がったトラストをとりあげました。

これらの点については、第三章のところであらためてふれたいと思いますが、『空想から科学へ』は、たんに科学的社会主義の学説を要約・解説した書物ではけっしてなく、そこに古典そのものを読む意義、楽しみもあるということも強調しておきたいと思います。

第一章Ⅱ空想的社会主義とは

第一章で何を学ぶか

第一章では、サン・シモン、フーリエ、オーエンという3人の空想的社会主義の思想の基本的な特徴、歴史的な役割、それが科学的社会主義とどういう関係にあるのかをつかむことが眼目です。その見地から第一章を読むとき、冒頭の一段落が大事なところです。そこでエンゲルスは、つぎのように言っています。

「現代の社会主義は、その内容からいえば、まず、一方ではいまの社会にゆきわたっている、有産者と無産者、資本家と賃労働者の階級対立の直観から、他方では生産のなかにゆきわたっている無政府状態の直観から生まれた産物である。しかしその理論的形式から言えば、それは、はじめは、一八世紀のフランスの偉大な啓蒙思想家たちがうちたてた諸原則をひきつぎ、さらにおしすすめたものとしてあらわれ、しかもいつそう徹底させたものということになっている。あらゆる新しい理論がそうであるように、いかに深くその根が物質的な経済的事実のなかにあつたにしても、それはまずすでに存在している思想上の素材に結びつかなければならなかった」（23ページ）

ここで言われていることは、第一に、社会主義というものは、資本主義経済の矛盾や階

級対立の「直観」から生まれたということです。

これは、社会主義とはそもそもどういうものかということを明らかにした大事な指摘だと思います。「社会主義」の看板をかかげたソ連が崩壊したとき、マスコミでは「社会主義は終わった。時代遅れだ」とさかんに言われました。実際には、マルクス、エンゲルスが展望した社会主義的未来とは無縁の人間抑圧、他民族抑圧の体制の解体であり、日本共産党は、そのソ連の巨悪とたたかってきた党として、解体を歓迎しましたが、マスコミなどでは「社会主義崩壊」論が吹聴されました。

しかし、ここでエンゲルスが指摘しているように、社会主義というのは、資本主義の生み出す様々な矛盾や対立を目の当たりにして、「何とかしなくては」と思うところから始まるものなのです。ですから、資本主義の矛盾や対立がなくならないかぎり、社会主義は終わらないし、社会主義が時代遅れになることはありません。いまアメリカなどで、“世界のどこかで第二、第三のマルクスが生まれているかも知れない”“いまこそマルクスの批判に耳を傾けるときだ”などといわれるのも、ここに根本的な理由があります。まずこの点を深くつかんで、おたがいの確信にしたいと思います。

第二は、エンゲルスは、新しい思想というものは、材料としては「すでに存在している思想上の素材」と結びついていくけれども、その内容、その根は「物質的な経済的事実」のなかにあると指摘していることです。これは、第2章のところで紹介する史的唯物論の見地そのものですが、エンゲルスは、第一章でも、この見地から空想的社会主義とは何であったのかを明らかにしています。すなわち、空想的社会主義は、「思想上の素材」としては一八世紀の啓蒙思想をひきついていて、したがって啓蒙思想をいっそう徹底させたものとしてあらわれたけれども、その内容は、一九世紀の資本主義の経済的矛盾のなかに根をもっているということです。

年代的な流れを整理する

ところで第一章を読んでいくと、空想的社会主義だけでなく、さらにさかのぼった一八世紀の「啓蒙思想家」なども登場するので、はじめは難しく感じるかも知れません。こうしたことがらは、一九世紀のヨーロッパの歴史や思想を知るうえで大切なことですが、さしあたりは注などを参考にして読みすすんでいくようにしましょう。ここでは、参考のために、マルクスたちをふくめ、年代的な流れ、前後関係を少し整理しておきます。

空想的社会主義の代表者は、フランスのサン・シモン（一七六〇～一八二五）、フーリエ（一七七二～一八三七）、それにイギリスのオーエン（一七七一～一八五八）です。マルクスは一八一八年生まれなので、三人はおおよそ五〇歳ぐらい年長ということになります。

彼らが、その社会主義思想を発表しはじめたのは一九世紀に入ったばかりのころでした。サン・シモンの『ジュネーブの一住民の手紙』は一八〇二年、フーリエの『四運動の

理論』は一八〇八年、オーエンが共産主義村の「計画」を公表したのは一八一七年です。マルクス、エンゲルスがはじめて綱領的文書を明らかにしたのは『共産党宣言』一八四八年のことですから、空想的社会主義は、著作や活動の時代という点では、三、四〇年ほど先立つこととなります。

啓蒙思想との関係でいうと、代表的な啓蒙思想家の生年は、ヴォルテールが一九九四年、ルソー一七二二年、デイドロー一七一三年などで、空想的社会主義者よりさらに五〇年ないし七〇年ほどさかのぼることになります。またその著作は、ルソーの『人間不平等論』が一七五五年、デイドロたちが中心となった『百科全書』の刊行が一七五一年から六〇年代にかけてですから、著作の出版でも、空想的社会主義者たちより五〇年ほどさかのぼる。そういう関係になります。

そして、その間に、一七八九年、フランス革命が起こり、封建制度が倒されますが、資本主義が本格的に発展しはじめるのは一九世紀に入ってからのことです。しかし、早くも一八三一年にはフランスのリヨンで最初の労働者の蜂起が起こり、一八三八年から四二年にかけてはイギリスでチャーティスト運動が広がるなど、労働者の階級闘争が起こっています。

こういうおおよその流れを頭に入れておくと、啓蒙思想と空想的社会主義の関係も分かります。これは簡単ではないでしょうか。

空想的社会主義とは

さて、サン・シモン、フーリエ、オーエンは、それぞれの角度から資本主義の害悪を批判し、こうした矛盾や欠陥のない、よりよい社会、より合理的な社会を探究しました。理想の社会をめざすという点では、封建社会の不合理を批判した一八世紀の啓蒙思想家と共通しています。「啓蒙思想家たちがうちたてた諸原則をひきつぎ、さらにおしすすめたものとしてあらわれ、しかもいっそう徹底させたものということになっている」(23ページ)といわれる所以です。

しかし、空想的社会主義と啓蒙思想のめざしたもののあいだには大きな違いがありました。それは、啓蒙思想家たちが、法律や権利のうえで自由や平等が実現すれば理想的な社会が実現すると考えたのに対して、空想的社会主義者は、法律的な自由や平等の実現だけでは搾取や社会的な貧富の格差はなくなるならない、産業と生産のしくみそのものをあらためなければ、本当に万人が平等に生活する理想社会は実現しないと考えたことでした(28ページ)。

そこには、それぞれが根ざしている「物質的な経済的事実」の違いが反映しています。啓蒙思想は、資本主義がようやく生まれはじめたばかりの一八世紀に登場した思想です。そこでの課題は、封建社会の身分制度やさまざまな制限にたいして、資本主義の発展を可能にする自由や権利、法のもとでの平等をかちとることでした。それにたいし、空想的社

会主義が登場した一九世紀初めには、資本主義はまだ未熟だったとはいえ、すでに発展を開始し、そのもとでの労働者階級のたたかいは始まっていた。そうした現実には、空想的社会主義者たちは、資本主義の害悪をのりこえた未来社会（社会主義、共産主義）を展開したのでした。

マルクス、エンゲルスは、科学的社会主義をつくりあげるときには、空想的社会主義の克服に努力を払いました。しかし、彼らが社会主義思想の最初のあらわれとして、歴史的な役割をはたしたことは積極的な評価を与えています。エンゲルスは、『空想から科学へ』でサン・シモン、フーリエ、オーエンの思想を紹介（33〜45ページ）したとき、彼らの弱点をあげつらうのは「三文文筆家」にまかせて、われわれは彼らの「天才的な思想の萌芽や思想をよころぶ」（33ページ）と強調しています。またマルクスは、たとえば『資本論』第一部第八章「労働日」で、労働者のたたかいにふれたなかで、「資本の理論」への最初の「挑戦」として、オーエンが労働日の制限を主張したことに言及しています（『資本論』上製版Ⅰa、518ページ、新書版②519、520ページ）。

よく学習会で「空想的社会主義というのは、ダメな社会主義ではなかったのか」とか「マルクスたちが空想的社会主義を評価しているのを知って驚いた」という質問や感想が出されますが、歴史的に積極的な役割をはたしたというプラスの面と、それが弱点をもっていたという限界の面と、両面をきちんとつかむことが大切です。

なぜのりこえられなかったのか

それでは、空想的社会主義の弱点、科学的社会主義によってのりこえられなければならないなかった問題点とは何でしょうか。エンゲルスは、次のように書いています。

「三人のすべてに共通していることは、彼らがこのころまでに歴史的に生み出されていたプロレタリアート〔労働者階級〕の利益と代表者としてあらわられたのではないということである。啓蒙思想家たちと同様に、彼らはまず特定の階級を解放しようと思わないで、直ちに全人類を解放しようと思った。……本当の理性と正義がこれまで世界でおこなわれなかったのは、ただ人びとがそれらを正しく認識しなかったことだけによるのである。まさに天才的な個人が欠けていたが、その天才がいまやあらわれて真理を認識した。彼がいまあらわれたこと、真理がたったいま認識されたということは、歴史的発展の連関から必然性をもってでてくる、避けられない出来事ではなくて、純然たる偶然の幸運である」（27〜28ページ）

ここでエンゲルスが指摘しているのは、次の2つの事柄です。

第一は、空想的社会主義者たちは、それぞれ、より合理的な社会としての未来社会の青写真、見取り図を示すことはできたが、どうして資本主義がより高度な社会へ発展するか、その歴史的な条件を明らかにすることができなかったということです。彼らの未来社会論は、「天才的な個人」（28ページ）による「真理」の発見ということではなかった

たのです。

第二に、その未来社会をめざす運動の担い手はだれかという問題でも、答えを見出すことができなかったということです。彼らが労働者階級の代表としてではなく、直ちに全人類の解放をめざしたというところにそれがあらわれています。事実、フリーエもオーエンも、自分たちの理想社会の計画への援助を、各国の政府や資本家たちに求めました。

それゆえ、空想的社会主義は、資本主義の害悪を批判することはできても、資本主義の矛盾や対立がどこから生まれてくるのか、どうしたらそれらをなくすることができるのか、そうしたことを明らかにすることができませんでした。第2章のおわりところで、エンゲルスは、次のように指摘しています。

「従来の社会主義はたしかに現存の資本主義的生産様式とその結果を批判したが、しかしそれを説明することができなかったし、したがってそれを克服することもできなかった。従来の社会主義はそれを簡単に悪いものとして投げ捨てることができただけである」(60ページ)

資本主義を「悪いもの」として投げ捨て、否定するだけでは、ほんとうに社会主義が力を発揮することはできません。そこに、空想的社会主義のいちばんの問題がありました。

第二章Ⅱマルクスの「二つの偉大な発見」

第一章の結論として、エンゲルスは、「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤のうえにすえられなければならない」(46ページ)と指摘しました。それにこたえて、第二章では、社会主義を空想から科学へ発展させたものは何かが明らかにされています。

ここで学習する内容は、三つあります。一つは、弁証法的なものの方です。二つめに、その弁証法と唯物論の見地からみると、人間社会のしくみはどうなっているかという史的唯物論の見地です。三つめは、剰余価値の理論で、それによって資本主義の秘密が明らかになったと指摘されています。

弁証法の三つの特徴

まずとりあげられているのが、弁証法の問題です。

不破議長は『科学的社会主義を学ぶ』で、弁証法の特徴を、形而上学的なものの方と対比しながら、つぎのように整理しています(同書46ページ)。

- (1) ものごとを、全体的な関連や相互のつながりのなかでとらえる。
- (2) すべてのものを、生成し消滅するものとして、あるいは運動や変化のなかでとらえる。

(3) 固定的な境界線や「不動の対立」にとらわれず、ものごとをとらえる。

これにたいし、形而上学というのは、ものごとを、(1) 個々ばらばらにとらえる、(2) 固定した変化しないものとみなす、(3) “白は白、黒は黒”といった固定的な枠組みでとらえる——いわば“石頭”式のものの方です。

『空想から科学へ』の学習でも、まずこの整理をよく頭に入れておくことが大切です。そのうえで、弁証法的なものの方の特徴を、古代ギリシャ以来の科学と哲学の歴史のなかで、大きくふりかえったエンゲルスの説明を読んでみましょう(『空想から科学へ』47～58ページ)。

古代ギリシャらしい大きな歴史のなかで

——人間が、自然や歴史などをとらえるときまず目の前にあらわれるのは、すべてのものごとがたがいに関連しあい、作用しあっている姿であり、すべてのものが運動・変化する、生成・消滅している姿である。古代ギリシャの哲学者たちは、それを、“万物は流動している”(すべてのものは変化している)と、ありのままに、弁証法的にとらえていた(エンゲルスは、彼らは「天成の弁証家」だったと書いています)。

——しかし、すべてのものは相互に関連しあっている、たえず運動・変化しているというのは正しいとしても、それだけでは、それが何であるかは分からない。そこで、たがいに関連しあい、たえず運動・変化しているなかから、個々の事物をとりだして、分類したり、分解・解剖したりして、一つひとつ研究することが必要となる。そして、実際そうやって自然科学の研究は発展してきた。

——それとともに、「自然物や自然過程を個々ばらばらにして、大きな全体的連関の外でとらえる習慣」が生まれ、ものごとを運動しているもの、変化するもの、生きているものとしてとらえるのではなく、静止しているもの、固定不変のもの、死んだものとしてとらえる考え方が生まれ、それが自然科学から哲学にうつされ、形而上学的な考え方が成立した。

——形而上学的なものの方というのは、常識にあつた考え方のようにみえるし、実際に「対象の性質に応じて広い狭いはあるが、かなり広い領域で正当」なものでもある。しかし、その範囲を超えると、形而上学的な見方では「解決できない矛盾」にぶつかってしまう(その例として、エンゲルスは、生物の死という問題をとりあげています)。

——こうして自然科学がさらに発展していくと、形而上学の枠におさまらないようなさまざまなことが明らかになってくる。それらは、ものごとを本質的に「連関、連鎖、発生と消滅において」とらえる弁証法的なものの方の正しさを確認している(ただし、実際に弁証法的に考える自然科学者は少ないので混乱が生まれていると、エンゲルスは指摘しています)。

エンゲルスは、このようにのべて、形而上学的なものの方について弁証法の特徴を

描き出しています。不破議長が整理した弁証法の三つの特徴が、歴史の流れのなかで、生きいきと語られていることがわかるでしょう。

この弁証法をふたたびとりあげたのは、ドイツの哲学者ヘーゲル（一七七〇～一八三一）です（54ページ）。マルクスもエンゲルスも、若いころ、このヘーゲルの哲学を学びました。

ヘーゲルは、自然から人間の歴史、人間の思考過程にいたる膨大な哲学体系をつくりあげました。しかし、その哲学は観念論の立場に立つものだったので、唯物論の立場へとつくりかえられなければなりません。エンゲルスは、そうやって成立した「現代の唯物論」は「本質的に弁証法的」だと強調しています（57ページ）。

経済を土台として社会をとらえる

そして、弁証法と唯物論の立場から、人間の社会とその歴史をとらえたのが史的唯物論（「唯物論的歴史観」59ページ）です。

エンゲルスは、「現代の唯物論は歴史のなかに人類の発展過程を見るのであり、その発展過程の運動法則を発見することがその課題である」（57ページ）と書いています。そして、その課題をはたすための材料——「歴史観に決定的な転回をもたらした歴史的諸事実」（58ページ）は、プロレタリアート（労働者階級）とブルジョアジー（資本家階級）のあいだの階級闘争として、すでにヨーロッパの歴史のなかに登場していました（一八二三年のリヨン蜂起など）。「物質的利害にもとづく階級闘争」（同前）、あるいはさまざまな階級の「物質的利害」の対立というものを明らかにして、そのことによって、人類の歴史的な「発展過程の運動法則」を示す——そこに史的唯物論の意義があります。

史的唯物論によって何が明らかにされたのか——それをエンゲルスは簡潔に説明しています（59ページ）。

（1）これまでの歴史は、原始社会を除いて、階級闘争の歴史であった。
（2）たがいにたたかうあれこれの階級は、それぞれの時代の経済的諸関係の産物である。

（3）だから、社会のその時代、時代の経済的構造が、社会の「現実の土台」をかたちづくっている。法律的・政治的制度あるいは宗教や哲学といった人びとの社会的な意識（「見解」）は、その土台のうえにたつ上部構造であって、その上部構造は、結局のところ、土台から説明されるべきである。

ここでは、史的唯物論のなかでも中心となる「土台・上部構造」という考え方が簡潔に説明されています。これは、社会のしくみ、成り立ちを建築物にたとえたものですが、経済を土台にして社会をとらえるということです。そして、その経済的構造に根ざして、さまざまな階級の利害の対立、階級闘争が生まれ、それが歴史の発展の原動力になってきたということなのです。

第一章の冒頭で、エンゲルスが、新しい思想は古い思想から「思想上の素材」を受けつぐが、その内容はそれぞれの時代の経済のなかに根ざしていると説明していたことは前に紹介しましたが、これはまさに史的唯物論の見地であることが分かると思っています。

資本主義の搾取のしくみ

このように史的唯物論の見地が明らかにされると、何よりも重要なことは、社会主義は、空想的社会主義のように「天才的頭脳の偶然的な発見」としてではなく、労働者と資本家の階級闘争の「必然的な産物」としてあらわれるということです（59〜60ページ）。資本主義のもとで労働者の階級闘争がどうしておこってくるのか、その原因を資本主義の経済のしくみのなかに探り、そして資本主義のつくりだしたもののなかに「この衝突の解決の手段を発見する」ことです。そして、マルクスは、『資本論』に結実する経済学の研究のなかから、「剰余価値」のしくみを明らかにすることによって、資本主義の搾取の秘密を暴露したのです。

ところで、『空想から科学へ』では、搾取のしくみは「不払い労働の取得」（61ページ）であるとして、ごく簡単に説明されているだけです。これだけでは分かりにくいので、若干補足して解説してみたいと思います。

いま、労働者が1時間で生産する価値の大きさを2000円だとしましょう。また、労働者が一日暮らすのにさまざまな生産物が必要ですが、それらを生産するのに全体で4時間分の労働が必要だと仮定しましょう。この場合、労働者の一日の労働力の価値は、2000円×4時間＝8000円になります。

そこで資本家は、価値どおりに一日8000円の賃金で労働者を雇って、8時間働かせるとしましょう。すると、労働者が一日の労働でつくりだす価値は2000円×8時間＝1万6000円になります。資本家は、そのうち8000円を労働者に賃金として支払っているのです、残り8000円が資本家の利益として残ることになります。

これをより立ち入って見ておくと次のようになります。すなわち、労働者は、一日の労働時間のうち、最初の4時間で賃金に相当する価値（2000円×4時間）を生産し、さらにあとの4時間で、資本家の利益となる8000円（2000円×4時間）の価値を生産した、ということなのです。最初の4時間の労働には賃金という対価が支払われていますが、あとの4時間の労働には何の対価も支払われていません。だから、あとの4時間の労働を「不払い労働」といいます。しかし、この不払い労働も新しい価値を生産しているであり、それはまるまる資本家のものになります。これが剰余価値であり、資本家のもうけになります。

資本主義の搾取のしくみを明らかにするうえで重要なことは、資本家が労働者の労働力を「価値どおり」に買った場合でも、労働者は搾取されているということを説明することでした。マルクス以前にはそれが説明できなかったため、労働者は資本家にだまされてい

るとか、資本家が不当にかすめとっているとか非難するだけで、資本主義の経済のしくみを説明できなかったのです。この剰余価値の理論によって、はじめて資本家が労働力を「価値どおり」に買った場合でも搾取されていることが明らかにされました。

エンゲルスは、史的唯物論と剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露は、マルクスの「二つの偉大な発見」であり、その発見によって社会主義は科学になったと指摘しています(61ページ)。これは、第一章の最後で「社会主義を科学にするためには、まずそれが実在的な基盤の上にすえられなければならない」と指摘したことへの答えといふべきものです。第一章から第二章へ、空想から科学へと社会主義の発展を大きな流れでつかめるのではないかと思います。

なお、搾取のしくみについては、マルクスの『賃金、価格および利潤』や『資本論』にも挑戦して、さらに学習を深めてほしいと思います。不破議長の『科学的社會主義を学ぶ』の97〜99ページでは、『空想から科学へ』のもとになった『反デューリング論』での説明をもとに、搾取のしくみが分かりやすく解説されています。

第三章Ⅱ「科学の目」で資本主義をとらえる

第一章、第二章では、社会主義を科学にするには、それを実在的な基盤のうえにすえなければならなかったこと、そして、史的唯物論と剰余価値の理論による資本主義的生産の秘密の暴露というマルクスの「二大発見」によって、それが可能となったことを学びました。

その「科学の目」で資本主義をとらえると、そこにはどんな矛盾が存在しているか、その矛盾をなくすためにはどうしたらよいか、そして資本主義の矛盾をのりこえたあとの未来社会はどんな特徴をもった社会になるのか。第三章では、科学的社會主義の立場からの資本主義批判と未来社會論が明らかにされます。

『空想から科学へ』は、マルクスと『資本論』にたいする攻撃にエンゲルスが反撃した『反デューリング論』がもとになっていることは、前に紹介しました。ですから、『反デューリング論』はもちろん、『空想から科学へ』も、『資本論』第一巻でマルクスが明らかにした理論的成果を縦横に生かして書かれています。とくに第三章では、『資本論』からの引用もおりませながら、資本主義の発生から没落までをダイナミックにえがき出している、『資本論』学習への手引きともなるものです。

社会発展の究極の原因は？

まず第三章の冒頭で、エンゲルスは、もう一度、史的唯物論（「唯物論的歴史観」）の基本的立場を明らかにしています。そして、経済こそが社会の土台であり、階級関係も経

済構造によって決まってくることを確かめたうえで、それならば、社会発展の「究極の原因」も経済のなかに求めなければならないと指摘しています。

「すべての社会的変動と政治的変革の究極の原因は、人間の頭のなかに、すなわち、永遠の真理と正義についての人間の認識の発展に求めるべきではなくて、生産様式と交換様式の変化に求めるべきであり、それは哲学のなかでなくて、その時期の経済のなかに求めるべきである」（62ページ）

社会の矛盾や弊害をなくすための人びとのたたかいは、これまでも、また今日も、日本各地で、そして世界中でもたたかわれています。そこには、「人間らしい暮らしをした」と「大切な自然や地球環境を守りたい」など、さまざまな気持ちや動機があるでしょう。しかし、なぜそんな矛盾や弊害が生まれるのか——その原因は、その時期の経済のしくみのなかに探らなければならないということです。

エンゲルスはさらに、矛盾や弊害の原因が経済のなかにあるのなら、その矛盾や弊害をなくす手段も経済のなかに求めなければならないと指摘しています。

「それはまた同時に、暴き出された弊害を取り除くための手段もまた、変化した生産関係そのもののなかに——多かれ少なかれ発展して——存在しているに違いないということの意味する。この手段は、けっして頭のなかで考案すべきものではなくて、頭をつかって現存の生産の物質的事実のなかに発見すべきものである」（63ページ）

だからこそマルクスは、資本主義経済の研究にとりくみ、『資本論』の完成に精力を注いだのでした。同時に、現実の経済は日々発展しているのですから、マルクスの解明でこゝと足れりとするわけにいかないことも明らかです。いま私たちがこの日本で直面している様々な問題、矛盾を解決する「手段」は、マルクスたちの成果を全面的に受けつぎながら、さらに私たち自身が自分たちの「頭をつかって」見つけなければならないことはいまでもありません。

資本主義の体制的矛盾をどうとらえるか

さて、それでは「科学の目」で資本主義をとらえると、そこにはどんな矛盾が存在しているのでしょうか。エンゲルスは、第三章で、資本主義の生成から没落までをダイナミックにえがきながら、それをつらぬく体制的な矛盾を「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」として定式化し、それを「資本主義の根本矛盾」と呼びました。

生産の変化——個人的生産から社会的生産へ

資本主義の矛盾を明らかにするために、エンゲルスは、資本主義以前——中世の農業や工業と比較しながら、議論をすすめています。

資本主義以前の社会では、生産に直接たずさわる労働者（農民や職人）が、労働手段（土地や農具、仕事場や道具）を所有していて、その労働手段をつかって自分自身が働いて生産する、そういうやり方が一般的でした。

ところが資本主義になると、機械が登場します。道具は、一人で使う「個人の生産手段」（65ページ）でしたが、機械は「人間の集団によつてのみ使用できる生産手段」（同）、つまり「社会的な」生産手段です（註）。そして、生産手段が道具から機械にかわるのにつれて、生産力が大きく伸びるとともに、生産そのものが「個人的行為」から「社会的行為」に変わります。

（注） 厳密に言えば、生産手段といった場合、道具や機械だけでなく、それを使って働きかける対象——原材料が含まれます。しかし、ここはエンゲルスの書いているのにしたがって議論を進めることにします。

その結果、でき上がった生産物も「個人の生産物」から「社会的生産物」に変わります。たとえば、自動車工場では、ある労働者は溶接の一部だけを受け持ち、別の労働者は座席シートをはめ込むだけ、というようにたがいに仕事を分担しあって（これを「分業」といいます）、工場全体として一つにまとまって、自動車を生産しています。また、自動車の部品は別の工場、別の会社で生産されている場合もあります。だから、完成した自動車を指して、ある労働者が「これは私個人の生産物だ」といったらおかしいことになりません。

取得のルールは昔のまま

それでは、でき上がった生産物はだれのものになるのでしょうか。

これを「取得」の問題といいますが、中世では、これはきわめて単純明快な問題でした。個々の労働者が、自分のものである原料や労働手段をつかって、自分自身が働いて物をつくっていたのですから、でき上がった生産物は当然、その労働者のものでした。「生産物にたいする所有は自分の労働にもとづいていた」（67ページ）。つまり、自分の労働にもとづく取得です。

資本主義になると、生産は、すでにみたように個人的生産から社会的生産に変化しました。しかし、取得の方は、ひきつづき「個人の生産物」であるかのように扱われました。

ただし、その「性格」はすっかり変わっています（68〜69ページの注を参照）。取得する個人は、以前のように、自分の労働で生産物をつくりだした労働者ではなく、労働者をやとって働かせる資本家です。資本家は、工場や機械——労働手段の所有者であるということ、他人（労働者）の生み出した生産物を自分のものにします。

「労働手段の所有者は、生産物もはや彼の生産物ではなくて、もっぱら他人の労働の生産物であるにもかかわらず、ひきつづきその生産物を取得したのである」（68ページ）

ジ)。

これを「資本主義的取得」といいます。

「資本主義の根本矛盾」の定式化

ここからエンゲルスは、「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」こそが資本主義のさまざまな矛盾を生み出すもつとも根源的な体制的矛盾だと結論づけました。

「生産手段と生産は本質的に社会的になっている。しかしこのような生産手段と生産は、各人が自分の生産物を所有し、それを市場にもちだすというような、個々人の私的生産を前提とする取得形態のもとにおかれる。生産様式はその前提を廃棄しているにもかかわらず、それはこのような取得形態のもとにおかれる。この矛盾が新しい生産様式に資本主義的性格をあたえるのであるが、この矛盾のなかに、現代のすべての衝突がすでに萌芽としてふくまれているのである。新しい生産様式がすべての決定的な生産分野とすべての経済的に決定的な国々でますます支配的になり、それによって個人生産が駆逐されてとるにたらない残存物になるにつれて、社会的生産と資本主義的取得とが両立できないこともいつそうはつきりとあかるみに出てこないわけにはいかなかった」(68ページ)

92ページから、もう一度第三章の内容を要約したところでは、「社会的生産物は個々の資本家によって取得される。これが根本矛盾であり、そこから、今日の社会がそのなかで動いているすべての矛盾、そして大工業があかるみにだすすべての矛盾が発生するのである」(93ページ)と書いています。

これが「資本主義の根本矛盾」と呼ばれるものです。第三章を読むと、この定式化が『資本論』第一部、とくに第二章「いわゆる本源的蓄積」でのマルクスの説明を基礎としていることが分かりますが、こういうかたちでの定式化は、エンゲルス独自の工夫というべきものです。

この見方は、私たちがいま、現代の日本と世界の資本主義を分析する場合にも、きわめて重要で有効な視角の一つとなっています。

個々の企業は、マルクスのころとは比べものにならないぐらい大きくなり、大企業のもつ経済的な力は、一国の経済全体に、それどころか世界中に巨大な影響をおよぼすほどになっています。ところが、そうした巨大な力は、依然として個々の企業のもうけのためにつかわれています。そのために、不況のさなかでももうけのために労働者を一方的に解雇する、海外で生産した方が安くつくとなれば、さっさと工場を海外へ移転してしまう、大規模な環境破壊もかえりみない。こうしたところに、「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」の今日的な現われをみることができます。

資本主義の内部での「生産の社会化」の三つの形態

「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」を根本的に解決する道は、生産の社会的性格にふさわしく、取得も社会的なものにあらためること、すなわち生産手段を社会の手にうつすことです。これは、社会主義への前進を意味しています。

しかし、資本主義は、矛盾や危機に直面したからといって、黙って社会主義に席をゆずるわけではありません。矛盾の深まりを資本主義の枠のなかにおさえこんで、資本主義の存続と発展の道をきりひらこうとします。

「強力に発展していく生産力は生産力の資本という性質に反抗し、生産力の社会的性質を承認させようとする強制をますます強めていくが、この生産力の反抗と強制が、資本主義的生産関係の内部で可能なかぎりです、ますます生産力を社会的生産力として扱うように資本家階級自身に強要するのである」（80ページ）

このように資本主義の枠のなかで、生産力の社会的性格を部分的に承認する仕組みを發展させます。これを「生産の社会化」といいます。そしてエンゲルスは、資本主義の内部での「社会化の形態」として、株式会社、「トラスト」、国有化の3つを取り上げています。

株式会社——経営の仕事は「有給の使用人」の手に

株式会社というと、いまでは当たり前ですが、マルクスのころは、企業というと圧倒的に個人企業であり、資本家は個人資本家でした。しかし、個人では集められる資金にはかぎりがあり、生産力の高まりとともに機械や工場が大規模化するようになると、限界が生じてきます。そこに登場したのが株式会社です。株式によってたくさんの人から資金を集め、個人では不可能だった大きな資本が登場するようになりました。

同時に株式会社のもつで、資本家のあいだに一種の“分業”が生まれてきます。大多数の株主は株式をもつだけで、経営には直接かかわらなくなります。そして、実際の企業の経営には、大株主がみずからあたる場合もありますが、多くの場合は、株主によって選ばれた専門家（「有給の使用人」）がおこなうようになります。

このような資本家の内部での“分業”の成立は、それまで資本家がいなければできないと思われていた実際の経営の仕事が「有給の使用人」でもできること、つまり資本家は「なくてもよい」存在であることを示しています。エンゲルスはこう指摘します。

「恐慌が、ブルジョアジーには現代の生産力をこれ以上管理する能力がないことを暴露したとすれば、大規模な生産施設と交通施設が株式会社やトラストや国有に転化したことは、その目的のためにはブルジョアジーがなくてもよいことをしめしている。資本家のすべての社会的機能は、いまでは有給の使用人によっておこなわれる」（83ページ）

エンゲルスが『空想から科学へ』を書いたとき、『資本論』は第一部しか刊行されていませんでした。しかし、実はマルクスも、『資本論』第3部で、株式会社においては経営者としての役割は「単なる管理人・支配人」に転化している、株式会社は「資本主義的生

産の最高の発展」の結果であり、社会主義・共産主義への「必然的な通過点」であると指摘するなど、エンゲルスとほぼ同じ結論を下していました^(注)。

(注) マルクスの株式会社論は、新日本新書『資本論』⑩756〜764ページで展開されています。不破議長の『マルクスと「資本論」』②192〜198ページをぜひ参照してください。

トラストとカルテル

資本主義の枠内での「社会化」の二つめとして、エンゲルスは、「トラスト」をとりあげています。「トラスト」の問題は、一八九一年のドイツ語第四版ではじめて書き足されたものです(ドイツ語第四版序文、19ページを参照)。

株式会社というかたちで大企業が登場すると、さまざまな分野で少数の大企業どうしが結びついて、共同でその分野全体を支配する「独占」が生まれやすくなります。「トラスト」はそうした独占の一つのかたちで、主にアメリカで発達しました。

トラストは、加盟する企業が合同して、その産業分野全体を支配する巨大な単一企業をつくるというものです。有名なのは、一八七九年に成立したスタンダード石油トラストで、約四〇の石油会社を結合し、設立当時、アメリカの全製油能力の九〇〜九五%を支配しました。これに似たものとして、ドイツを中心に発達した「カルテル」があります。カルテルは、トラストのように単一の企業に合同するのではなく、各企業が独立性を残したまま、協定をむすんで、生産を調整したり、価格を取り決めたりするものです。

トラストもカルテルも、「生産の規制を目的とする結合体」であり、生産すべき総量を定めて、相互に割り当てたり、販売価格を指定したりします。つまり、その産業部門においては、トラストやカルテルが中心となって「統一的に運営される」ようになるわけです。

エンゲルスは、そのことを「自由競争は独占に転化し、資本主義社会の無計画的な生産は、せまりくる社会主義の前に降伏する」(81ページ)と評価しました。もちろん「社会主義の前に降伏する」といっても、トラストやカルテルは「資本家の利益のため」のものです。しかし、その枠のなかで、生産の社会的性格を部分的に承認せざるをえなくなつたものということができます。

国有化について

最後に、「国有化」があげられています。国有化について、エンゲルスは、「まず大規模な交通施設、すなわち郵便、電信、鉄道にあらわれる」と書いています。事実、日本の近代の歴史をふり返ってみても、鉄道事業は、はじめは民間をふくめて始まりましたが、やがて全国的な幹線鉄道は国有化されました(一九〇六年)。郵便事業のように、はじめ

から国の独占事業として始まったものもあります。

この分野では、一九八〇年代以降いわゆる「民営化」の動きがすすみ、生産の「社会化」が「株式会社→トラスト→国有化」という順序ですすむという単純な図式ではすまない事態が生まれています。しかしこれは、国の財政をつぎ込んでおこなわれてきた交通事業のような分野まで、大企業のもうけの場として明け渡すようになったとみるべきでしょう。

今日の目で読み返してみると、エンゲルスが、国有化の問題にかかわって、どんな国有化でも社会主義的だとする議論を「にせの社会主義」（82ページの注）として批判していることは注目してよいと思います。

矛盾の解決と未来社会論

巨大になった生産力を社会が掌握する

エンゲルスも書いているように、株式会社などの「社会化の形態」は、あくまで資本主義の枠のなかでのがらです。したがって、生産の社会的性格の承認をせまるといつても、資本家の利益のためという基本的な性格はすこしも変わっていません。そこにとどまらず、「社会的生産と資本主義的取得との矛盾」を根本から解決するためには、なにが必要なのでしょう。エンゲルスは、つぎのように述べています。

「この解決はただ、現代の生産力の社会的性質を実際に承認し、したがって生産様式、取得様式、交換様式を生産手段の社会的性格と調和させるということのうちにはしかありません。そしてこのことは、社会がみずから管理する以外にはどのような管理も手におえないまでに発達した生産力を、社会が公然と、率直に掌握することによってのみ、おこなうことができる」（84ページ）

つまり、生産は社会的になったにもかかわらず、生産物、生産の果実は相変わらず資本家が自分のものになっている——ここに「根本矛盾」があるのですから、その根拠になっっている生産手段を社会にぎることによって、取得のルールを生産の社会的な性格と一致させる。それによって、矛盾を解消することができるというのです。「生産力を、社会が公然と、率直に掌握する」とは、資本家のもとにある生産手段を社会全体の手に移すこと、これを「生産手段の社会化」といいます。

市場経済の破壊的作用を規制する

生産手段の社会化によって、どんな未来社会が生まれるのでしょうか。エンゲルスが指摘している点を紹介しましょう。

一つは、資本主義のもとでの「生産の無政府状態」を克服して、経済活動全体を「社会全体ならびに各個人の欲望に応じた」ものに社会的・計画的に規制していくことが可能になるといふ点です。

資本主義では、私たちが消費するものは、ほとんどすべて商品として生産されています。これを商品生産とか市場経済といいます。市場経済の特徴は、企業にしても個人にしても、生産が、自分の消費のためではなく、他人が消費する品物を、市場に売りに出して、他人に買ってもらうことを目的におこなわれるところにあります。

しかし市場経済のもとでは、その商品にどれぐらい需要があるのか、同じ商品をつくる生産者がほかにどれぐらいいて、市場にはどれぐらい売りに出されるのか——そうしたことは、事前に決まっているわけではなく、市場での売り買いによってはじめて明らかになります。ですから、ある生産者のつくった商品が売れるかどうかは、実際に市場に出してみるまで分かりません。せっかく生産した品物がまったく売れなかったり、売れ残って値下がりしたりすることもあります。その結果、企業が倒産するということもおこります。そうやって、一方で商品が大量に売れ残りながら、他方では、必要なものが必要なだけ生産されず、手に入らないということも起こります。市場経済は、そうした売れ残りの危険やアンバランスをもっています。これを「生産の無政府状態」とか「生産の無政府性」といいます。

「生産の無政府状態」が生まれるのは、生産手段が個々の資本家の手ににぎられていて、生産が個々の企業の利益を目的としておこなわれているからです。ですから、生産手段を社会の手に移すことによって、それを克服することが可能になります。

「そのこと「生産手段の社会化——引用者」によって、今日では生産者自身にたいして反抗し、生産様式と交換様式を周期的に突き破り、ただ盲目的に作用する自然法則として暴力的、破壊的に自己をつらぬいているだけの生産手段と生産物の社会的性格が、試算者によって十分に意識してはたらかされるようになり、攪乱と周期的な崩壊の原因から、生産そのものの強力な槓杆に変わるのである」（84ページ）

「今日の生産力について認識されたその本性にしたがって扱うことによって、社会的生産の無政府状態にかわって、社会全体ならびに各個人の欲望に応じた生産の社会的・計画的規制があらわれてくる」（85ページ）

個人の生活手段を保障する

二つめに、生産手段の社会化とともに、取得のあり方が根本的に変化するという点です。

「こうして、生産物がまず生産者を奴隷化し、ついでまた取得者をも奴隷化する資本主義的取得様式は、現代の生産手段そのものの本性に基礎をおく生産物の取得様式によってとってかわられる。一方では、生産の維持と拡大のための手段としての直接に社会的な取

得によって、他方では、生活手段と享楽手段としての直接に個人的な取得によってとってかわられるのである」(86ページ)。

つまり、経済活動の維持・拡大のために社会として必要な部分——生産手段——は、社会が取得し、社会的に保障する。それにたいして、個人の生活のために必要なものは、「直接に個人的な取得によって」保障されるというのです(ここには書かれていませんが、労働能力をもたない子どもやお年寄り、障害者や病気の人のたちのために必要な部分——これは社会的に取得され、社会的に保障されます)。

よく「共産主義は個人の財産をとりあげる」という反共攻撃があります。これは、マルクスの時代からあった攻撃ですが、マルクスたちは、それにたいして、「共産主義になつてこそ、個人の財産は実現される」と反論してきました。『空想から科学へ』のこの指摘も、そうした攻撃への反論の一つといえます。

そして、個人に保障される生活手段の内容そのものも、資本主義のもとではさけられないさまざまな浪費をとりのぞいて、飛躍的に豊かに、肉体的精神的に全面的で自由な発展を可能にするものになります。

「社会による生産手段の取得は、現存する生産の人為的な障害を取り除くだけでなく、現在では生産のさけられない付随物であり、恐慌のときに頂点に達する、生産力と生産物の積極的な浪費と大量破壊をもとり除く。さらにそれは、今日の支配階級とその政治的代表者たちのおろかな奢侈的浪費をとり除くことによって、大量の生産手段と生産物を社会全体のために解放する。ただ物質的に十分にみち足りており、日に日にますます豊かになっていくだけでなく、肉体的、精神的素質の完全で自由な育成と活動を保障するような生活を、社会的生産によってすべての社会の成員にたいして確保する(ことが可能になる)」(90～91ページ)

「自由の王国」への飛躍

三つめに、そのことは、たんに個々人の全面的で自由な発展を保障するというだけでなく、はじめて人間が人間社会の主人公となる「自由の王国」への飛躍を実現するものであるという、人類史的な視点からの歴史的な意義づけがあたえられています。

「社会による生産手段の掌握とともに、商品生産が廃止され、したがってまた生産者にたいする生産物の支配が廃止される。社会的生産の内部の無政府状態にかわって、計画的、意識的な組織があらわれる。個体生存競争はおこなわれなくなる。それによってはじめて、人間はある意味で、最終的に動物界から離脱し、動物的生存条件から出て真・19・に人間的な生存条件にはいる」(91～92ページ)

「そのときからはじめて、人間は自分自身の歴史を十分に意識して自分でつくるし、そのときからはじめて、人間によって作用させられてきた社会的諸原因は、ますます大きな度合いで人間の欲したとおりの結果をもたらす。それは、必然の国から自由の国への人間

の飛躍である」(92ページ)

社会主義・共産主義への前進とともに、社会全体にほんとうの意味で人間らしい生存と生活の諸条件が保障され、そこから人類の新しい発展がはじまります。資本主義をのりこえて社会主義・共産主義の未来社会へ前進することが、人類社会の歴史において、どのような意味をもつか、壮大なスケールでの解明といえるでしょう。

不破議長の問題提起をうけて

「根本矛盾」論のとらえ方

以上、『空想から科学へ』第3章のポイントをみてきました。最後に、エンゲルスの「根本矛盾」論にかかわって、不破議長によって投げかけられている新しい問題提起を紹介しておきたいと思います。

一つは、エンゲルスが「社会的生産と資本主義的取得の矛盾が、プロレタリアートとブルジョアジーの対立として、あかるみに出てきた」(70ページ)と書いている問題です。

つまりエンゲルスは、労働者と資本家との階級対立を、「根本矛盾」の現われ(現象形態)の一つと位置づけているわけです。しかし、労働者と資本家との階級対立、階級闘争は社会発展の原動力そのものだといわなくてはなりません。不破議長は、「この階級的な矛盾は、資本主義の成り立ちの根本であって、なにか経済体制の矛盾の一現象形態などではないはずです」(不破哲三『科学的社会主义を学ぶ』新日本出版社、173ページ)と指摘しています。こういう点から、労働者と資本家との階級対立を「根本矛盾」の現象形態とみる見方は、再検討して見る必要があるということです。

二つめは、「根本矛盾」のとらえ方が“枠組み”論になっていて、現実の資本主義のさまざまな弊害や混乱、対立を生み出している原因、原動力を十分とらえきっていないのではないかという提起です。

不破さんは、この間、資本主義経済の推進力は「できる限り大きな量の剰余価値を吸収しようとする本能」(新日本新書版『資本論』②395ページ)、つまり分かりやすくいえば「利潤第一主義」であるとくり返し強調してきました(『科学的社会主义を学ぶ』107ページほか)。そういう視角から、資本主義の動きをダイナミックにつかもうということです。

さらに不破さんは、一連の『資本論』研究のなかから、マルクスが、資本主義の体制的な矛盾をつぎのような点にこそみていたことを明らかにしました。すなわち、「利潤第一主義」を推進動機とする資本主義は、一方では、資本主義社会で人口の最大多数をしめる労働者階級は貧困な状態におき、消費の狭い限界をつくりだしておきながら、他方では、

生産の無制限的な拡大への衝動・傾向をもち、消費の狭い限界を無視して「生産のための生産」に走る——この二つの側面の矛盾と衝突こそが、資本主義の体制的矛盾だということです^(注)。

(注) 詳しくは、不破哲三『科学的社会主義を学ぶ』106～120ページ、同『マルクスと「資本論」』①125～132ページ、③27～35ページなどを参照してください。

現実の資本主義を突き動かしている推進動機、原動力を出発点にして、資本主義の生きた矛盾を「運動論的に」つかむ。そういう角度から、あらためてエンゲルスの「根本矛盾」論をふり返ってみると、たしかに不破議長が指摘するように、資本主義の矛盾のとらえ方が構造的で静態的な印象をあたえることはまぬかれません。

もちろん、エンゲルスの「根本矛盾」論が間違っているとか、あるいはマルクスとはまったく異なった見地だということではありません。しかし、両者の違いをそのままにしておかないで、もう一度、マルクスと『資本論』そのものに即して掘りさげてみたらどうなるか。私自身には、不破議長の問題提起は、そういう現代的な問題意識にたった、大変知的刺激にみちたものだと思えます。古典の学習というのは、けっして昔の文献をただ読むということではないのだということも、あらためて強く感じました。

商品生産と「生産の無政府状態」について

二つめに、商品生産と「生産の無政府状態」の問題についてもふれておきたいと思いません。

「生産の無政府状態」について、エンゲルスは、つぎのように述べて、これも、労働者と資本家の階級対立とならぶ「根本矛盾」のあらわれ（現象形態）の一つと位置づけました。

「社会的生産と資本主義的取得との矛盾は、いまや個々の工場における生産の組織化と社会全体における生産の無政府状態との対立としてあらわれる」（74ページ）

資本主義とともに商品生産が社会全体をおおうようになり、「生産の無政府状態」は、資本主義のもとで、社会全体に大きな影響をおよぼすようになります。その最大のものが、資本主義を周期的におそう恐慌だといえます。

しかし、厳密に言えば、商品生産による「生産の無政府状態」は、恐慌が起こりうるという、もつとも抽象的な可能性、条件をあらわしているだけです。つまり、「個々の工場における生産の組織化と社会全体における生産の無政府状態」との矛盾から、直接的に恐慌を導き出すのは、恐慌がなぜ起こるのかという説明として不十分なものです。「生産の無政府状態」がそのまま恐慌の原因となるのであれば、商品生産を基礎としている資本主義は、いつも恐慌におそわれるということになってしまうはず^(注)です。

(注) この点は、「市場経済を通じて社会主義へ」という道を考える場合にも重要な点です。

市場経済Ⅱ生産の無政府性Ⅱ恐慌ということであれば、生産の無政府性や恐慌を克服しようと思つたら、市場経済を廃止するしかなくなります。市場経済と社会主義的な計画性の結合を考えるうえでも、市場経済Ⅱ生産の無政府性Ⅱ恐慌という図式は、さらに掘り下げた検討が求められるものです。

不破さんは、『マルクスと「資本論」——〈再生産論と恐慌〉』全三巻のなかで、「生産の無政府状態」という恐慌の「可能性」のうえに、市場経済のたえざる変動と均衡への動きという範囲をこえて、不均衡を拡大・累積させて恐慌へといったる「根拠」「原動力」はどこにあるかを追求しています。この問題は、今日の日本のデフレ不況の問題をどうとらえるかということにも結びつくテーマですが、この方向でとらえていってこそ、資本主義のダイナミックな動きをとらえることができます（『科学的社会主義を学ぶ』173ページ参照）。

おわりに

以上、『空想から科学へ』の読みどころを私なりに紹介してきました。『資本論』第一部の成果を生かしたエンゲルスの独自の解明、エンゲルスとマルクスの結論との一致、あるいは、『資本論』全体を見通したときに明らかになる資本主義の体制的な矛盾のとらえ方のちがいなどもとりあげました。そうした問題も視野に入れてこそ、“古典を歴史のなかで読む”ことができるのではないでしょうか。

科学的社会主義の理論は、けっして一度でき上がってしまえばそれで終わりというようなものではありません。古典も、出来合いの教科書のようにきれいに整理されているわけではありません。『空想から科学へ』の学習とともに、そうした古典にくり返し立ち返りながら、新鮮な問題意識で学ぶことの大切さと楽しさを感じていただければと思います。

(おわり)